

幼児の自然体験における 安全性の確保

一般社団法人 森のようちえん はっぴー 沼倉幸子

子どもを取り巻く環境は時代と共に変化し、現在は意識をしなければ自然の中で遊ぶ機会が
とても少なくなっている。都市化が進んだことで自由に遊べる広場や自然が減少し、自然
は私たちの生活から遠い存在になりつつある。こんなにも自然からかけ離れて生きる時代は、これ
までになかったのではないだろうか。

自然は小さな子どもにとって好奇心をかきたてる不思議な世界である。心が安らぎ、豊かな感情
が育まれる。好奇心や思考力、表現力の基礎が培われ、幼児期の発達にとっても重要な役割を果た
す。しかし、自然には危険な要素もある。幼児期の自然体験が安全に行われるには、子どもの発達
や心理を理解したうえで、リスクマネジメントをしっかりと行うことが重要である。

幼児の自然体験の場では、いくつかの特徴的な姿がある。よくある姿として、棒や木の枝を拾っ
て持ち歩く。高いところに登ったり、隙間に隠れたりするのも好きだ。水があれば、触れたり入っ
たりするし、石を拾って投げたり、小さなものだと鼻の中に入れてしまうことだってある。桑の実
や木苺などの木の実を、自分の手で取って食べるのも大好きである。好奇心旺盛な子どもにとって
は、自然の中にあるものは何でも魅力的だ。

その魅力を最大限に生かして、子どもが伸び伸びと自分らしく成長できるようにするには、自然
体験活動が安全に行われなければならない。そこに寄り添う大人が、ある程度の自然知識を体得し
ていると良いのだが、自然と離れた生活をしている大人も多く、指導者自身の体験不足も感
じている。

例えば、木登りが得意な子どもがいたとする。スルスルと登る子どもを見たときに、木登りの体
験がある大人は、どの枝にどう足を掛け、下りる時には、どこを注意して見ていたらよいかを実感
として分かる。危険と感じたときに掛ける言葉も、落ち着いて要点だけ伝えることができる。しか
し木登りの体験がない大人は、怖くて見てられない。一刻も早く無事に下りてくることだけを願
い、具体的にどう危険を回避するかが考えられない。そのような方には、自分が怖いと思ったとき
に、子どもに木から下りてきてもらうよう声をかけてくださいと伝えている。あの人が見守ってい
るから、自分も同じ見守りができるかということ、自然の中では難しいことがある。大人が自然体験
活動の経験があるかどうか安全確保に関わってくると思われる。

では、その経験が少なければ指導者として寄り添うことができないのかということ、そういうこと
ではない。経験が豊かな人も少ない人も、共通しているのは自然体験活動のリスクマネジメントを
しっかりと計画し、実行に移せるようにすることである。自然体験活動のリスクマネジメントは、
NPO 法人自然体験活動推進協議会などで講習を行っているので、専門家から学ぶことをお勧めし
たい。また万が一事故が起きてしまった場合、命を守るための救急法訓練を怠らないようにするこ
とも大切である。

リスクマネジメントをしっかりとすることで、自然を甘く見ることなく、怖がることなく、その世
界を存分に楽しんでもらいたいと思う。